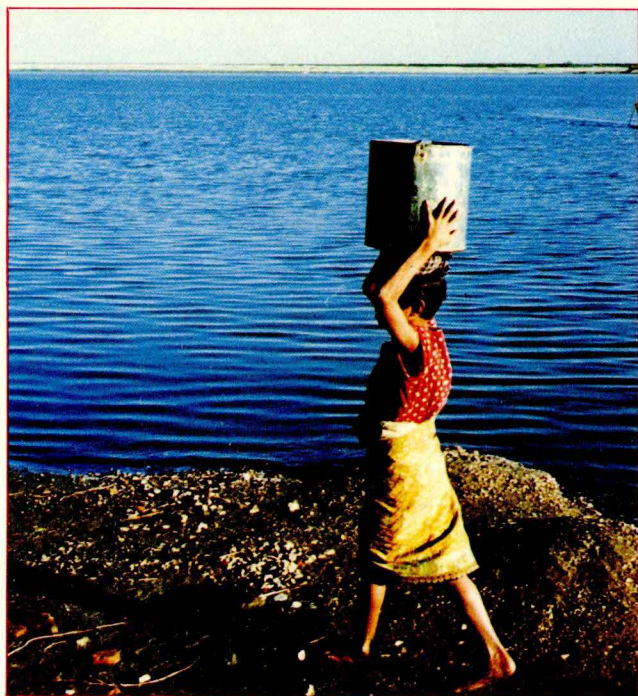


UNKNOWN JAP

マレー・タイ・ビルマ 戦争の小記録

桜井滄平 著



かど創房

アンノウン ジャップ

櫻井滄平著

かど創房

著者 桜井 滄平

本名 ^{きよか} 清香 1923年静岡県相良町生れ。

大阪外語中退。慶大経済学部卒。1943年12月、学業を中断、静岡の中部第3部隊に入営。転じて熊本で訓練中南方軍に再転属、マレー・タイを経て1945年在ビルマ歩兵第106連隊に赴任、末期の作戦に参加。降伏後タトン近郊に隔離され、翌年から英印軍ブroom・ミンガラドン両収容所で償いの労働。1947年秋復員、復学。その後進駐の濠軍エンジニア部隊、百貨店等に勤務。1983年退職後は折々筆を執る。

アンノウン ジャップ
UNKNOWN JAP ©1985

昭和60年8月 初版発行

著者・桜井 滄平

印刷所・株式会社方英社

製本所・カノマタ製本

発行者・門馬正毅

発行所・かど創房

埼玉県越谷市大成町8-2520-44 ☎343

☎0489-86-8800 振替東京6-32461

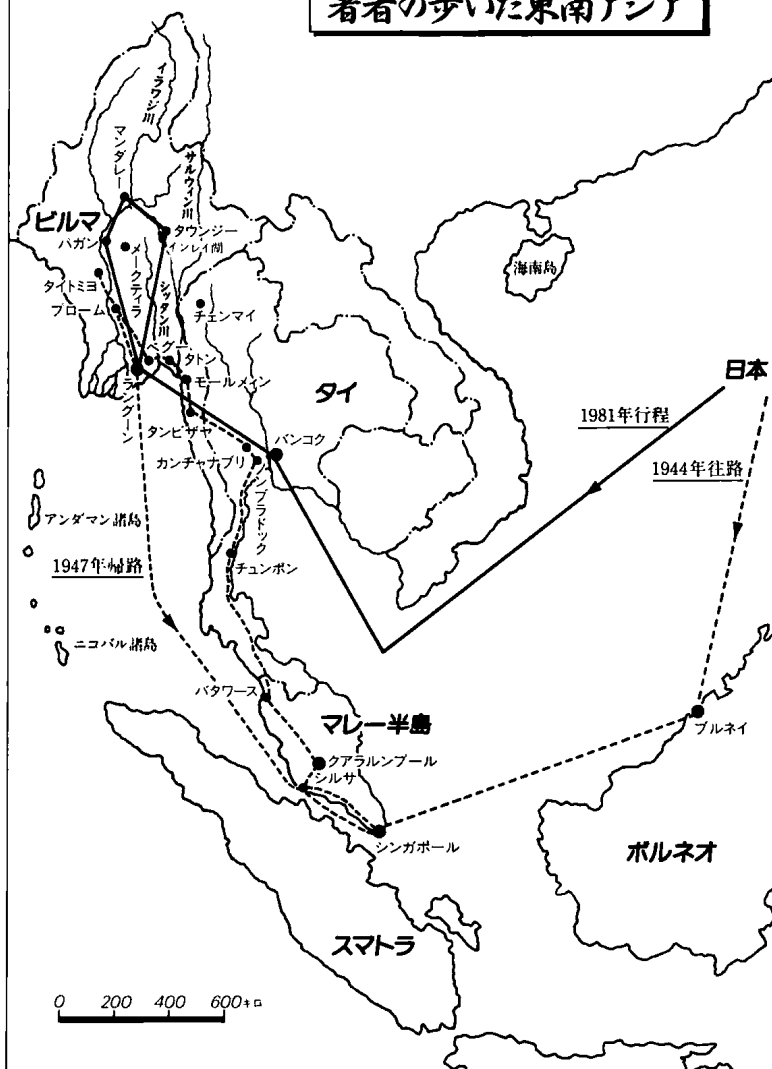
NDC911 / ©1985 / 246p・20×14cm

ISBN4-87598-200-3 C0092

定価1600円 許可なく転載、複写複製を禁じます。

<検印省略> 乱丁・落丁本はおとりかえします。

著者の歩いた東南アジア



添えることば

ドイツ文学者 高橋健二

『UNKNOWN JAP』は、青春の七年間を戦中の学窓と空しい戦場で過した作者の自己確認であると同時に、いたましく死んで行った戦友への鎮魂歌であろう。それを表白せずにはいられない桜井滄平さんの気持ちは、私にもわかる。

しかし、戦場の体験が全くなく、戦禍にも会わなかった私が、何か言おうとしても、ただむなしさを感じるばかりである。若い歳月をビルマ戦線で「雨と泥濘と銃撃と飢えと死と未知の極限状況」にたえず直面して生きたというだけで、私の胸はふさがるばかりである。

私は桜井さんの詩について何を言う資格もない。桜井さんは、戦前私の翻訳した「ドイツ戦歿学生の手紙」を読んで深い感銘を受けたということで、私を訪ねて来られ、この詩集を示された。文学的な修飾をことさら避けたような赤裸々な痛烈な事実には、私は強く心をゆすぶられた。

戦友の多くが、「無名ジャップ」という一片の十字架になって異国の土に化したのに、桜井さんはよくぞ帰って来られた、と深い感動をおぼえた。ビルマ派遣軍の兵士は三十万三千名だったのに、帰還したのは三分の一ほどの十一万八千名だという。なんという悲惨！

四十年たっても、その悪夢を払い去ることのできない桜井さんの気持ちを思うと、号泣がこみあげてくる。その感情をおさえて、桜井さんのためにせめて何かのお役に立ちたいと思い、かねて尊敬しているかど創房の門馬正毅さんをご紹介しますのである。

この詩集を私はやはり多くの人に読んでいただきたいと思うのである。

(一九八五、三、七、)

目次

2	添えることば……高橋健二	45	百歩蛇 ひゃっぱだ
8	砲車の曳かれ行く響きの中に 訣別	49	カンポン テレコマン
10	モスクワ大学講義録	55	タンジョン トワン
17	ムッシュウ ロラン	60	ビルマ国モールメイン マンゴー
20	この日のことを	64	敗軍
30	馬と機関銃と望郷と 厩当番	70	一番高い塔の歌
35	髭剃り	74	爆撃
40	白都	79	橋の下
		83	爆撃直後
		87	遺品

ビルマ感傷飛行

198 ビルマ感傷飛行

206 イラワジにて

*

211 内地・マレー・タイ・ビルマ 戦争の小記録

*

236 註 記||本文*印の解説。

*

244 あとがき

*表紙写真||イラワジ河の水汲み。

砲車の曳かれ行く響きの中に



学園に強まる戦時色。合同演習後の整列。(静岡県草薙運動場1940年)

訣
別

勝ちて帰れ

生きて還れ

對い合つて

僕等は言葉もなく

がっしり

手を握り合つた

君の瞳の輝き

熱い掌 たなごころ

空は玉髓色の雲を浮べて

色あくまで濃い

八月

君が戦野に

赴く日だ

一九四〇年八月

モスクワ大学講義録

顎の先から汗を滴らせ

真中の畳をずらすと

赤い表紙の二冊の本が

新聞紙の下に並んでいた

モスクワ大学講義録

地下出版の国禁の書

彼は

膝を抱えたくくり猿の姿勢で

中味を

ども
吃りながら熱っぽく話した

学校では誰とも話さない彼が

そんなものを僕に見せる

意図が俄には分らなかったが

その信賴は嬉しかった

カナダ生れで抜群の英語力を持つのに

フランス語部では

進級出来なかった二人の中の一人

彼を落第させた

一切の教師を無視したが

神父に当てられると

猫背をゆすりながら

綺麗な発音で素直に答えた

教練の整列は

早い順と決っていたので

ゲートルの巻き方もよく出来ない彼は

必ず遅れて最後尾に来た

いつも出遅れる僕は

隣に並んだ

天王寺裏の汚い下宿は

日当りの悪い四畳半

本もろくに並べてない部屋で
絶え間なく彼は煙草をふかし
爪の伸びた短い指の手で
専らシュールな詩を書いていた

軍の語学生と彼Fとは

両極に位置する異端者だった

その彼が僕を下宿に誘った

見せられた講義録は

表紙の色一つとっても

鮮烈な衝撃を僕に與えた

邦字タイプで打った内容は

直譯で甚だ読みづらい上に

質問するだけの知識もなく

ざっと見ただけで彼の手に戻すと

彼は恭しく^{うやうや}畳の下にしまった

何のために秘密を覗かせたか

わけを説き明す

言葉はなかった

終電車も通り終った

大阪の深夜の街に

砲車の曳かれる音が

重苦しく響いていた